

第二部門 〈子どもの育成に関する論文・実践記録またはエッセイ〉 入選論文

子どもの育成に関する実践記録

―パラスポーツがもつ可能性と教育―

上  
佑  
太

うえ ゆう た  
上 佑 太 さん

**[略 歴]**

年 齢 23歳  
住 所 広島県東広島市  
略 歴 石川県金沢市出身  
広島大学大学院教育学研究科 健康スポーツ科学講座研究生  
専攻：コーチング、パラスポーツ、スポーツボランティア

**[応募動機及びコメント]**

私は広島大学で教育やスポーツを専攻する中で、それらに関する知識や情報を得るだけでなく、それらを生かし、スポーツや教育を通じて社会に貢献していくことが大切だと学びました。そこで私は、パラスポーツに興味を持ち、現在まで関わり続けています。またその中での実践を通じて感じたことや、先生方・先輩方からのご指導、友人との学びをまとめたいと思い応募しました。

今回私が応募した実践記録を評価して頂き、大変光栄です。また、生まれ育った石川県での受賞についてもとても嬉しく思います。

近年では東京五輪・パラリンピックの開催が決定したこともあり、日本全国でスポーツへの注目が高まっています。その中で私はスポーツと教育を通じて、スポーツの価値やパラスポーツのもつ可能性を一層広め、誰もが他者を尊重し、互いを思いやることのできる社会を育んでいきたいと考えています。

最後になりますが、多くの方々への感謝の気持ちを忘れず、暁烏敏賞に選んで頂いたことを励みに今後も頑張りたいと思います。

## 本文の概要

はじめに、パラスポーツとは「Parallel sports」という言葉が起源で、一般的には障がい者がおこなうスポーツを指しますが、もう一つのスポーツという意味ももっています。また、近年では誰もが親しみ、楽しむことができるスポーツという視点からも、パラスポーツの普及が図られています。

本文の構成と内容を紹介していくと、まず第一章では、私がパラスポーツに興味をもつきっかけとなった講演にふれています。次に第二章からは、パラスポーツと教育に関して、自身の実践記録を書きました。その中では、「私たちの身近にある、障がいと小さな壁」、「ボランティアと教育」、「スポーツを通じた人と社会の育成」、「学校教育と共生社会」という四つの視点から、私の感じたことや思いを述べています。その内容を簡単に紹介すると、実践記録一では、私が大学四年生の時におこなったパラスポーツに関する調査を紹介し、学生とパラスポーツの関わりやその現状と課題にふれています。実践記録二〜四では、私がこれまでに参加したパラスポーツ体験会やそのボランティア、障がいをもった子どもの指導経験について紹介し、それらの経験の中で、教育現場やスポーツ現場、障がいや社会に対して私が感じたことを述べています。最後に本文のまとめでは、パラスポーツがもつ可能性と教育というテーマに沿って、私の思いを述べています。

私は、本文を通じて少しでも多くの方が、パラスポーツや障がい、共生社会、子どもの教育について考える助けになりたいと思っています。また私自身も、スポーツや子どもの教育に携わる者として、これまで以上に周囲の人と協力しながら、積極的に学び、考え、実践に励んでいきたいと思っています。

## 目次

第一章	パラスポーツとの出会い	p. 34
—	パラスポーツ講演会をきいて—	—
①	パラスポーツの起源とスポーツの魅力	—
②	障がいに対する壁と小さな勇気	—
③	ボランティアが人と社会を育む	—
④	パラスポーツと共生社会	—
第二章	パラスポーツが人と社会を育む	p. 35
実践記録一	パラスポーツに関する調査と考察	p. 35
考察①	パラスポーツに対する認知と関心	—
考察②	大学生とパラスポーツの関わり	—
考察③	パラスポーツの現状と小さな壁	—
考察④	パラスポーツへの参加と学生の成長	—
実践記録二	パラスポーツ体験会に参加して	p. 36
①	子どもたちとパラリンピアンとの交流	—
②	体験を通じて想像力が育まれる	—
③	学校教育の現状とスポーツ教育の可能性	—
④	教育と指導者の姿	—
実践記録三	スポーツボランティアに参加して	p. 37
①	学生ボランティアの活躍と課題	—
②	スポーツマンシップの育成とその可能性	—
実践記録四	スポーツコーチングと発達障がい	p. 38
①	障がい者教育の違和感と教育への提案	—
まとめ	パラスポーツがもつ可能性と教育	p. 39

## 第一章 パラスポーツとの出会い

私がパラスポーツを初めて意識したのは、

テレビで北京五輪・パラリンピックを観戦した時です。当時の私は小学生で、スポーツが大好きだったので、五輪で日本選手達が活躍する姿に大興奮した記憶があります。その中で特に印象に残っている場面は、陸上競技男子四×一〇〇mリレーでの日本チームの走りです。日本チームのアンカー朝原選手が、バトンを高く投げ上げメダル獲得の嬉しさを表現した姿からは、日本チームの強い結束力や努力が報われたことが伝わり、感動を覚えました。また五輪を通じて、スポーツが大好きだという気持ちはさらに高まりました。そして北京五輪がおわり、次に私が目にしたスポーツは、パラリンピックでした。パラリンピックの中継は五輪に比べ少なかったですが、その様子はメディアを通じて連日伝えられていました。その時に私は、義足の選手がトラックを駆ける姿や視覚障がいをもつ選手が球技をする姿を目にし、障がいがあってもスポーツができることを初めて知りました。しかし当時の私は、選手の姿に驚きはしましたが、私がふれてきたスポーツとは全く違う世界のものとしてパラスポーツをみていたと思います。

### ― パラスポーツ講演会をきいて―

そんな私が、パラスポーツに関心をもったきっかけは、大学四年時に参加したパラスポーツに関する講演会でした。その講演は大学の授業の一環として、講師の方をお招きしておこなわれました。内容は、パラスポーツの歴史と現状、ボランティアの活躍とパラスポーツ支援、パラスポーツを通じて人と社会が育つ可能性についてでした。ここでは、講演を通じて感じたことを四つにまとめたので、紹介していきます。

#### ① パラスポーツの起源とスポーツの魅力

まず、パラスポーツという言葉の意味は、「もう一つのスポーツ」であることを知りました。これを知ったときに、パラスポーツも私がふれてきた大好きなスポーツの一部だと強く感じました。それと同時に、障がい者がスポーツをする姿を特別な目や奇異な目で見ていた自分が、少し恥ずかしくなりました。また、スポーツの素晴らしさは、誰もが様々な関わり方で親しむことができ、他者と感情を共有できることだと感じました。

#### ② 障がいに対する壁と小さな勇気

講演の中で、現代社会にはパラスポーツをスポーツの一部と捉える意識が薄いことと、日常生活の中にも、障がい者と健常者という小さな壁があることを学びました。当時の私は、全盲の方が駅のホームを歩いている、何もしなかったと思います。それは、障がい者には特別な支援が必要だという先入観や、自分には支援をできる力などないと思っていたからです。しかし講演を通じて、障がいは過剰に意識するものではなく、相手の身体や心を思いやり、支えあうことができるものだと考えるようになりました。またそのことは、スポーツにおけるチームワークと似通っていると感じました。今の私は、荷物を両手にもった妊婦さんに声をかける時と同じで、障がいをもつ人にも「何かできることはありませんか」ときいてみる小さな勇気が大事だと思っています。たしかに、視覚障がいや聴覚障がいに対する医療・福祉等の支援は必要だと思いますが、障がい者だから私には何も手助けできない…という小さな壁を自ら取り払い、誰に対しても思いやりをもつことが大切だと考えています。

#### ③ ボランティアが人と社会を育む

講演ではパラスポーツの支援に関連して、社会におけるボランティア

観にも触れられており、ボランティアの起源は、内側から湧き出る自由な意志と実践だと知りました。それまでの私は、ボランティアとは労力や時間をかけ、無償で何かをしてあげることと考えていました。しかし、自分の自由な意志と自発的に行動で人に喜ばれるようなボランティアは、自分も他者も嬉しい気持ちになると気づかされました。また、ボランティアの機会は日常に溢れており、誰でも簡単に実践できるものだと思います。ボランティアは計画的な支援をおこない、無償で時間や労力をかけることに注目が集まることが多いですが、日常生活で人に思いやりをもち、些細なことでも行動してみることも素敵なボランティアだと感じます。私は、皆が人に興味をもち、誰もが気軽にサポートをし合うようなボランティアが日常に根付くと良いと思います。また、私も普段から何気なく人に支えられていることに感謝しようと思いました。

#### ④ パラスポーツと共生社会

講演を通じて、パラスポーツは共生社会を育む手助けとなることを教わりました。私は共生社会を、障がいの有無等に関わらず、皆が他者を気軽に思いやり、輝かせることができる社会だと考えています。またパラスポーツは、人と社会の育成との繋がりが深いことも、講演を通じて強く感じました。そこで次の章では、私がパラスポーツと関わる中で、感じたことや考えたことを、実践記録としてまとめました。

## 第二章 パラスポーツが人と社会を育む

### 実践記録一 パラスポーツに関する調査と考察

ここでは、私が大学四年の時におこなったパラスポーツに関する調査と、そこから得られたパラスポーツの現状と課題についての考察を紹介いたします。この調査は、パラスポーツイベントのボランティアに参加した

大学生を対象に、彼らの参加動機やパラスポーツへのイメージを聞き取りました。また、調査を通じて、パラスポーツの実態を知ることが目的としたものでした。ここからは調査を通じた考察を四つ紹介します。

#### 考察① パラスポーツに対する認知と関心

一つめの考察は、日常生活でパラスポーツに触れる機会は、他のスポーツに比べ非常に少ないということです。調査対象となった一七名のうち一六名は、パラスポーツの種目や選手と直接関わった経験を、大学に入るまでもっていませんでした。またその理由としては、「パラスポーツの情報に触れる機会が全くなかったため」という声が多く聞かれました。このことから、近年では東京五輪・パラリンピックの開催決定に後押しされ、パラスポーツに触れる機会は多いですが、それまでは、パラスポーツの普及が進んでいなかったという現状が窺えました。

#### 考察② 大学生とパラスポーツの関わり

二つ目の考察は、大学生がパラスポーツに興味をもつきっかけは、大学内の団体や人物から情報を得る場合が多いことです。調査からは、広島県内の三つの大学にアダプテッドスポーツクラブ（以下、ASC）という団体が存在し、彼らはパラスポーツの普及を目的としていることが分かりました。またASCは、パラスポーツボランティアへの参加以外に、自分たちでパラスポーツイベントを運営し、それらを通じて、医療・福祉・教育の知識や経験を得ていることが分かりました。これらのことから私は、パラスポーツの普及やパラスポーツを通じた教育には、学生がもっと積極的に関わられるのではないかと考えました。

#### 考察③ パラスポーツの現状と小さな壁

三つ目の考察は、学生がもつ、パラスポーツに対するイメージに関する

ることです。調査において、学生のパラスポーツイベントへの参加動機は「自身の経験や知識を深めるため」、「競技や選手に興味をもったため」という動機が全員に共通していました。一方で自身が興味をもつ活動内容以外や、パラスポーツの競技や競技者には関心が薄いという傾向もみられました。その理由としては、パラスポーツを医療や福祉として捉えていることや、身近には存在しない障がい者のための特別なスポーツと考えていることが窺えました。このことから、スポーツと関わっている私たち学生の中にも、障がいやパラスポーツに対する小さな壁があることを改めて感じました。

#### 考察④パラスポーツへの参加と学生の成長

四つ目の考察は、パラスポーツへの参加を通じた、学生の心情変化に関するものです。多くの学生が、参加前には障がい者と接することに不安を抱えていましたが、参加後には「障がいの有無に関わらず、皆が一生懸命になれるスポーツは素敵だと感じた」という声や「パラスポーツに関わったことで、障がい者に特別な目を向けていた自分に気づかされた」、「障がいの有無に関わらず、自分から声をかけて人を支援したい」といった前向きな心情変化が数多く見られました。これらは、人に対して思いやりのある行動をとり、皆で嬉しい思いを共有できたことで芽生えた変化だと思えます。

私は本調査を通じて、パラスポーツが子どもの育成に深く関わることのできる可能性を感じました。そこで次の実践記録では、私がパラスポーツと関わってきた中で、子どもの教育について学び、考えたことを述べていきたいと思います。

#### 実践記録二 パラスポーツ体験会に参加して

##### ①子どもたちとパラリンピアンとの交流

私はこれまでに、広島、埼玉、福岡でおこなわれた「パラスポーツ体験会」に、計四度参加しました。この体験会には誰でも参加ができ、健常者の親子や学生が多く参加していました。また体験会には「みんなのスポーツ」という副題がついており、第一部で現役のパラリンピアン講演を聞いたのち、第二部で実際にパラスポーツを体験し、その楽しさや難しさを皆で感じるという内容でした。まず、講演の部で最も印象に残ったことは、参加した子どもたちの表情です。はじめは障がいをもつパラリンピアンに対して、尊敬や不思議な眼差しを向ける子が多かったのですが、最後には話を聞いている子どもたちの表情がとても輝いているようにみえました。

##### ②体験を通じて想像力が育まれる

次に体験の部では、多くの人が初めてパラスポーツを体験しました。私が参加した三度の体験会では、「ゴールボール」という球技がおこなわれました。ゴールボールとは、一チーム三名の選手が、特殊な装具を目につけ、目の前が真っ暗な状態でボールを交互に投げ合い、ゴール前での攻防をおこなうスポーツです。体験のはじめにパラリンピック金メダリストの浦田理恵選手が、「このスポーツの面白さは、チームワークがパフォーマンスを大きく左右することだ」と言っていました。実際に体験がはじまると、初対面の大人と子どもが、三人一組のチームを組みました。体験中には、視覚を制限されることに大きな不安を感じのですが、それに加えて初対面の人とチームを組むことにも、緊張を覚えます。しかし浦田選手が言っていたように、チームメイトと声を掛け合うことを実践してみると、徐々に不安は消え、良いプレーが次々生まれ、皆で楽

しくスポーツができます。多くの子どもたちにとって、視野が真つ暗な中スポーツをすることは初体験だと思います。またその体験には、不安や恐怖も感じると思います。しかしゴールボールのコート内には、不安や緊張を共有し、助けてくれる仲間がいます。また、仲間のサポートが優れているほど、競技中の安心感が増し、競技も楽しくできます。視界が暗闇に包まれたときや、そこで仲間にサポートされた時の子どもたちの感情は、パラスポーツならではの体験だと思います。またこのような体験を通じて、子どもたちのもつ他者への想像力は、育まれていくのではないのでしょうか。さらに、パラスポーツ体験から得られる、他者を想像し声をかける勇気や、他者から声をかけられる喜びは、子どもたちから社会へと広がっていくこともできると思います。そして私は、それらを社会に広げていくためには、学校教育が大事だと考えています。

### ③ 学校教育の現状とスポーツ教育の可能性

ここで学校教育の現状について考えると、ここでは、子どもたちに対し理想や目標が明確に示され、その実現に向け、良くも悪くもパターン化された指導がされすぎていると感じます。またその過程では、指導者があらかじめ恐怖や不安を取りのぞき、子どもたちに失敗をさせないことが重要とされているように感じます。しかしそれでは、パラスポーツ体験の時のように、子どもたちが自己と他者を観察・想像し、自ら答えを見つけていくことは難しいと思います。私は、大学まで部活動で野球をおこなったのですが、先生方は、不安や緊張と向き合いながらの挑戦を見守ってくださりましたが、また、その過程で多くの失敗がありました。が、今では多くの失敗経験からの学びが、私の長所にもなっています。私の経験から、スポーツを通じた教育の良さは、失敗をするチャンスが多く存在することだと考えました。学校においても、指導者が過度に子どもの失敗を嫌いとすぎると、子どもたちが自己を知り、自己と向き合い、

他者に目を向ける機会が潰れてしまうと思います。また、そうすると、子どもたちが人や社会への愛情をもつことも少なくなってしまうのではないのでしょうか。私は、子どもたちが失敗や不安と向き合う機会を、学校教育全体の中で積極的に設けていくべきだと思います。

### ④ 教育と指導者の姿

教育者にとって大事なことの一つは、子どもたちが失敗や不安に直面した時、すぐに正解を提示するのではなく、彼らが自己を知り、周囲と協力しながら、壁を乗り越えていく姿を見守ることだと思います。また指導者は、子どもたちの成長を見守ることに加え、自らも子どもたちの姿から学び続けることが大切だと思います。

### 実践記録三 スポーツボランティアに参加して

#### ① 学生ボランティアの活躍・課題

私はパラスポーツ体験会や、車椅子テニス大会等にボランティアとして参加し、運営にも携わりました。その中で特に、学生ボランティアの活躍と課題が印象に残っています。ここからは、私が参加したパラスポーツボランティアの中で、学生の活躍と課題がみられた例を二つ紹介し、パラスポーツと子どもの教育について感じたことを述べていきます。まず一つ目は、広島でおこなわれた車椅子テニス大会です。この大会には広島県内から一〇〇名を超える大学生ボランティアが参加し、その活動内容も、競技進行、大会運営、選手の健康管理、医科学・心理サポートなど、多分野にわたるものでした。また、競技の進行を大学のテニス部が担い、選手の健康管理を大学で医学を専攻する学生が担うといったように、役割が適材適所に割りふられていました。私はパラスポーツ支援を通じて、学生が自身の専攻分野の現場を体験できることは、とても良

いなと思えました。一方で、ボランテニアの働きには課題も感じました。それは、主役の選手をサポートする上で、学生ボランテニアの一体感がやや欠けていたことです。先述したように、ボランテニアの役割は多分野に渡るものでしたが、それぞれの専門家が、他分野と連携する姿勢はあまり見られませんでした。私は選手の医科学サポートの補助をしたのですが、選手の身体検査のお手伝いをすることはありませんでしたが、検査をした選手の試合をみる機会はありませんでした。また、競技の補助をしていた学生は選手の健康管理やスポーツ科学に触れる機会はありませんでした。パラスポーツボランテニアの特性として、医療・福祉・科学・技術指導等の様々な分野が選手に携わっていることが挙げられます。今大会でも、他分野を知り横の繋がりをを感じる機会があれば、選手にもより良いサポートができ、学生もさらに深い学びが得られたのではないかと思います。

このことから、スポーツと子どもの教育について改めて考えると、スポーツをサポートする医療・科学・コーチング等の全ての分野の大人たちは、率先して一丸となる姿をみせるべきではないでしょうか。今後は私自身も、多分野の人との交流をコーディネートし、子どもたちがスポーツに親しみ、学ぶことのできる機会を増やしていきたいと思えました。

## ②スポーツマンシップの育成とその可能性

次に、福岡でのパラスポーツ体験会では、ボランテニアが大学ラグビー部の選手たちを中心に構成されました。彼らは全日本選手権に毎年出場する強豪チームの選手達でした。当日は彼らが自ら考えて機敏に動き、参加者に対しても素晴らしい気配りができていたため、会場が良い雰囲気にも包まれました。私は彼らの姿から、チームとしての強さや団結力があると、そのチームの選手たちは、競技を離れた場所においてもスポーツマンシップが発揮でき、人や社会を喜ばせられるのではないかと感じ

ました。スポーツには、実施・観戦・支援等の多様な親しみ方がありますが、人はスポーツとの関わりを通じて、スポーツシーン以外でも生かせる、大切な力が育まれると思えます。また、パラスポーツの実施には多くの視点からのサポートが必要なため、特にパラスポーツは、学生の人としての力を養う貴重な機会になり得るのではないのでしょうか。私は、スポーツボランテニアに参加する学生が今後さらに増え、その体験を通じて、大人と子どもが互いにスポーツマンシップを学びあう機会が増えると良いと思います。

## 実践記録四 スポーツコーチングと発達障がい

ここでは、私が発達障がいをもった子どもに対しスポーツを指導した経験と、そこから感じたことをまとめました。

### ①障がい者教育の違和感と教育への提案

私は大学四年時から、放課後教育をおこなっているフリースクールで指導に関わらせて頂いています。またそこでは、障がいをもつ子どもたちとスポーツを通じた交流をしています。ここで一つの事例として、私が接したアスペルガー症候群をもつ児童の話をしめます。私は彼と、サッカーの指導を通じて交流したのですが、最初は彼を全く理解できず、人が傷つく言葉ばかりを発することに、私は嫌な気持ちになりました。二人一組での練習では、何度言ってもパスを出してくれず、私の嫌な気持ちにはたまる一方でした。しかしその時に、彼には人の感情を読み取りづらいという特性があることを医師や先生方から教わりました。そして、彼と向き合う方法を自分なりに考えた結果、障がいに注目しすぎるとはなく、私自身が声や身体全体で運動の楽しさを表現し、彼とサッカーの楽しさを共有してみようと決めました。また、彼はアスペルガー症候群という病気だと診断されていますが、私はそれを、性格や個性と捉え

るようにしました。そしてこの試みを継続していくうちに、徐々に彼にも変化が見られました。それは、私と一緒にになって喜びや悔しさを表現し、運動中にポジティブな言葉を発するようになったことです。この経験から、障がいに対する私の考え方が大きく変化しました。それまでは、発達障がいをもった子どもの指導と聞くと、障がいという言葉が頭に残り、特別な支援や気遣いが必要だという風に考えていました。しかし、障がいといわれている部分も彼らの特性や個性であり、「優しい」「怒りっぽい」といったような、人がもっている性格の一部と大きく違うなと思います。もしかすると障がいという言葉に対する窮屈な捉え方が、人の優劣や小さな壁をつくってしまっているのではないのでしょうか。

私はこの壁をできる限りなくしていきたいと思います。またそのためには、教育の力が必要だと考えています。ここで一つの提案として、学校教育では、子どもたちが障がいや特性を持った他者と関わる機会を、今より積極的につくと良いのではないのでしょうか。また社会においては、街の中心に誰でも遊べる広い公園と、養護施設や老人ホームが併設していると多くの人が障がいに触れ、障がいはどこにでも当たり前にあるものだと実感する人も増えると思います。私は障がいの有無に関わらず、皆が人に思いやりをもてる共生社会を、教育の力を借りながら育てていきたいと思っています。

ここまでは私の実践記録を述べてきました。ここからは、パラスポーツのもつ可能性と教育についてまとめ、本文を閉じたいと思います。

## まとめ パラスポーツがもつ可能性と教育

パラスポーツは、誰でも参加できるスポーツであり、医療・福祉・コーチング・教育など多分野との繋がりが深いものです。故に、パラスポー

ツを通じて、子どもも大人も、多様な価値観を持つ人と出会い、互いを知り、学び合うことができると思います。またパラスポーツは、共生社会を育む手助けにもなると考えます。この可能性を膨らませていくために、皆でパラスポーツの現状や課題だけでなく、社会にある小さな壁や障がいについても話し合い、価値観を共有していくことが大事ではないのでしょうか。また共生社会を皆で育む上で、子どもの教育は欠かせないと私は考えています。教育現場では、指導者が共生について考えながら指導をし、指導者も子どもと一緒に学んでいくことが大事で、小さな壁や行動に移していくことが大切だと思います。私は、教育やパラスポーツを通じて、障がいや特性の有無に関わらず、皆が人を思い、助け合うことが当たり前の社会を育てていきたいと思っています。

おわりに、東京五輪・パラリンピックに向けて、スポーツ界が盛り上がっている今だからこそ、パラスポーツの可能性は一層膨らんでいくと思います。私は、パラスポーツがみんなのスポーツであるように、皆と協力しながら、より良い教育と社会を今後考えていきたいと思っています。